

2025年6月1日発行 毎月1回1日発行 第55巻第6号 通巻616号

NEIGHBOR

vol.616

June 2025

6



自由なクリエイションで
大切な記憶にカタチを
アーティスト／野原邦彦



PARTY(樟、アクリル絵具_203×76×80 cm_2018)

「子どもの頃、水泳が好きだったんですが、当時の思い出のなかで一番心に残っているのが、初めて水中メガネをつけて泳いだ瞬間の風景なんです。子どもながらに不思議に感じたのは、水中メガネ

も一つ、野原氏が取り上げる特異なキーアイテムに水中メガネがある。これは、「自分のなかにあるはずの景色を見るために必要なフィルター」だと野原氏は説明してくれた。

「子どもの頃、水泳が好きだったんですが、当時の思い出のなかで一番心に残っているのが、初めて水中メガネをつけて泳いだ瞬間の風景なんです。子どもながらに不思議に感じたのは、水中メガネ

**形のない記憶と変化する雲
心地よい浮遊感を持つ木彫作品**

どこか鑑賞者を夢見心地にさせるような不思議な浮遊感を、野原邦彦氏の作品群は、いずれもまとっていた……。

本来、野原氏が取り組む木彫という分野は、いわば『重力との格闘』のような側面を少なからず持つ。しかも作品のスケールが大きくなればなるほど、この問

題はシリアスになっていく。だが、野原氏の作品は、かなり大きなものでもまるで重力から解き放たれたかのように軽やかだ。おそらく技術面から考えれば、巧妙な重心のずらし方があってのことではあるのだろう。しかし、それより何より野原氏の作品に心地よい浮遊感を与えているのは、結局のところ、自由さに振り切った豊かなイマジネーションにあるように筆者は思う。

実際、構図は多種多様なモチーフを大胆不敵にコラージュした自由きわまりないものだし、パステルカラーを迷うことなく選ぶ彩色も、どこかほかの世界線に飛んでいってしまいうようなほどにファンタジックで実に思い切りがいい。先ほど、ついイージーに夢見心地などと書いてしまったが、むしろここにあるのは、作家自身が記憶の断片からつくりだした夢そのものなのでは……とも思えてくるほど

に多幸感で溢れている。

冒頭から勝手な推察を長々と披露してしまったが、ここからは野原氏が好んで用いてきたモチーフについて、考えていきたい。もっとも重要なのは、やはり浮遊感との関連性が高い『雲』の存在だろう。

野原氏は言う。

「雲ってふわふわしていて形が定まることがなく、つねに状態変化を続けていますよね。そういうところのない

野原邦彦 (のらは・くにひこ) 氏
アーティスト

1982年北海道生まれ。2007年に広島市立大学大学院芸術学研究科彫刻専攻を修了。自身が感じ取った様々な状況を作品化し、現在の記憶からは排除されそうな自由や時間、欲望を表現する。色彩豊かで独創的な造形の木彫作品を中心に手がけ、近年はキャンバス作品や木の断片を用いたミクストメディアなどにも取り組む。2024年にはgallery UG(東京)で個展『泡と花』を開催。そのほかの主な個展に『今夜は本屋でパーティー』(銀座 蔦屋書店 GINZA ATRIUM、東京、2018)、『ステキな時間』(上野の森美術館、東京、2017)。国内のみならず、香港やアメリカなどのアートフェアにも参加。



自由なクリエイションで 大切な記憶にカタチを

アーティスト

野原邦彦

明確な形がない心象や記憶、あるいは日常の何気ない瞬間に生まれる心の揺らぎをとらえ続けてきた気鋭の彫刻家・野原邦彦氏。不定形な雲や煙、水といった事象をインスピレーションの源泉とするファンタジックな彫刻群によって、彼が追い求めるものは何なのか。ここでは、国内外で注目される野原氏に、作品に込めた想いをうかがった。

取材・文／石井里枝 撮影・写真／神尾亮多 写真提供・取材協力／gallery UG

ネをつける前と後では、水中の世界の見える方がびっくりするほど変わってしまったこと。同じように泳いでいたはずなのに、これほど鮮明で美しい世界が水のなかに広がっていることに、以前は気づくことさえできなかったわけですから」

つまり、肉眼では見えないはずの何かを写し出す謎のフィルターこそが、繰り返し登場する水中メガネというわけだ。

ちなみに5ページに掲載している『PARTY』という作品では、モデルとなった野原氏の長女がやはり水中メガネを装着している。巨大なクマやカエルに囲まれた彼女は、世界に向けて楽しげに手を広げているが、いったいその目には何が写っているのだろうか。

筆者は、このように作品側の立場から一緒にイメージを膨らませていく楽しさも、野原氏の作品の醍醐味だと考えている。そして鑑賞しながら、あらためて感じたことがある。それは想像でも妄想でもないから、現代人はもう少し心を軽やかにしてイメージーションの世界に親しむマインドを持った方がいいのかもしれない。大切なのは、日常の奥深くに実はちゃんと存在する、心がふわっと解放される瞬間を楽しむことなのではないだろうか。とはいえ、そういった瞬間は、大人の論理で何もかも言語化しても、外、見過ごしてしまう可能性がある。案外、野原氏自身も作家としてのステート

メントのなかで、自分が表現したいのは「記憶から排除されそうな自由や時間」だとつづった上で、それこそが「自分が自分であるため」に重要だと語っている。無論、子どもの頃に宿っていた魔法のような感性や自由なマインドが、年齢と共に失われることは事実だろう。だが、それでも、野原氏は言語による表現の外にある面白い何かを見つけることの大切さを、創作活動を通じて果敢に提示しようとしているように感じられた。

日常と地続きの創作活動がいつしか子どもの成長とリンク

前述した『PARTY』以外にも、長女をモデルとした作品は多い。たとえば『三』や『七』と名づけられた作品もそれにあたる。カンのいい読者ならすでにおわかりかと思うが、いずれもモチーフは七五三だ。ところで、重要なことなので、ここで野原氏に訊いておく。いったいどのような経緯があって長女の成長を

表現することになったのだろうか。

「実は、生まれた当時はまったくそんな考えを持ったことはありませんでした。ただ彼女が言葉をしゃべり始めたり、自分の意志で行動し出したときに、昔の自分の姿を俯瞰して見ているような感じがあつて、毎日がうれしい驚きの連続だったんです。さらにだんだんお互いに共有できる感覚が増えてくると、長女の世界が自分の体験とリンクするようになってきた……。ある種の気づきもありましたね。それは子育てのなかには、いくつもの視点や時間軸が存在するってことなんです。たとえば、子どもの視点は、かつての僕自身の視点でもあるし、それとは別に今現在の親としての僕の視点もある。そういう複数の視点が子育てに関わってくるのが、なんだかすごく新鮮で面白くなって思えてきたんです」

続けて野原氏は「時間軸についても同様に考えるべき」だと語ってくれた。

「いつの間にか長女の成長を見ながら、時間を遡って自分の子ども時代を再考するプロセスが、当たり前のことになりました。面白いのは、それによって同時期に自分が感じていたことの意味が以前より格段に深く理解できるようになったこと。いわば当時、見ていた事象の解像度が高まったんですね。さらに経験がループするような感覚があったり、僕の創作と子どもの成長がつながっていく感じもあった。そういうなかで、家族間で起き

ていることを表現するなら今のタイミングかもしれないと思えてきました」

創作は日常と地続きと考え、自分のなかの不定形な記憶を表現してきた野原氏にとって、子育てからの学びは大きかった。子どもが与えてくれるインスピレーションは、どこか懐かしいと同時にまばゆいばかりに刺激的でもあったからだ。



みまわし山をつくる(樟, アクリル絵具_153×64×63cm_2024)



七(樟, アクリル絵具_145.5×71×66cm_2022)



ダンデライオンとパフボール(樟, アクリル絵具_237×65×90cm/ 134.5×69.5×60 cm_2020 / 2021)



カプチーノ MB Middle(FRP_110.2×92×90cm_2025)



鯉花(樟, 墨汁, アクリル絵具, 真鍮棒_31×28×15.3cm_2023)



故郷の北海道で培った自然観
樹木への想いと今後の夢

現在は東京のgallery UGに専属で16年在籍し、国内のみならず海外にも活動の場を広げつつある野原氏。また、学生時代には広島市立大学芸術学部を選んだことから、東京と広島は作家として成長するにあたっての重要な修練の場となった。

一方で、心象風景ということであれば、何といっても故郷である北海道の存在が大きいと野原氏は言う。

「自然に対する感じ方は、やはり北海道に生まれ育ったことで培われたと思っています。おそらく空間のとらえ方にも影響しているんじゃないでしょうか。北海道は空一つとっても広々として壮大だ



Hot chocolate(樟, アクリル絵具_15.2×18.2×15.5cm_2025)

し、雲の大きさや動きも東京や広島とはだいぶ迫力が違うので、自然に対しては畏敬の念を持たざるを得ない。美しさだけでなく、ある種の過酷さを教えてくれるのが北海道の自然なんです。実際、小学生でもごく普通に吹雪のなかを数kmにわたって登下校する経験を積んでいますから。でも、考えてみると、ほかの地域で育ったら、今の作風には辿り着いてはいないかもしれない。たとえば『彫刻を続けるために必要な忍耐力をどこで養ったか?』と訊かれたとしたら、間違いなく故郷の北海道だと答える」

実際、『PARTY』クラスの大きさの彫刻作品となると、クレーンなしにはちよつとした移動さえも難しくなってしまう。冒頭でもふれたが、スケールの大きな木彫作品に、浮遊感を持たせることには、それほど物理的なハードルがともなうということである。では、もろもろの課題があるのにもかかわらず、なぜ木彫にこだわるのだろうか。

「もともとは絵を描くときの彩色にコンプレックスがあったんです。上手い人と比べると、ずいぶん自分の技術は遅れをとっている気がしていました。でも、木彫なら彩色しない方がむしろ王道なので、こつちを選んでみよう」と

だが現在は彩色が、野原氏の重要な個性の一つになっているわけだが……。

「ええ。だから人生ってなかなか想定通りに進まないものだなって(笑)。だ



A moment(キャンバスにアクリル絵具_F80_145.5×112cm_2025)

いぶ質問から脱線してしまいました。なぜ木彫にこだわるのかというと、樹木が重ねてきた長い歳月が、作品にのつてくることに特別な価値を感じるからなんです。それって、とても尊いことだと思います。それから、あと好みの木に出会えたときも、かなりモチベーションが上がりますよね。僕の場合、バランスを意図的に崩して浮遊感を生み出したって想いもある。なので、芯や重心がズレた木の方がよくて……。そういう木は傾斜地で育ったものが多く一般的には扱いづらく人気も

ないんですが、僕にとってはそれこそが大きな魅力となるんです」

なるほど。樹木が有する膨大な時間軸までも、作品のなかに取り込もうというわけだ。考えようによっては、こうした大らかな器のような作家性も、野原氏の真骨頂の一つといえるかもしれない。

最後に今後の目標についてうかがうと、「いつかはアメリカで!という想いを昔から持っています。木彫は体力勝負なので多少の根性も必要かもしれませんが、スケールの大きな展示をいつかはアメリカでしてみたいですね」という答えが返ってきた。浮遊感に満ちた作品群で、不定形な記憶にアプローチする野原氏の試みに、今後も注目したい。